＜ネタ＞　マリィは大変な世界を流出させました＜ネギま×Dies irae＞

紫貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＜ネタ＞　マリィは大変な世界を流出させました＜ネギま×Ｄｉｅｓ　ｉｒａｅ＞

【Ｎコード】

Ｎ０７４５Ｒ

【作者名】

紫貴

【あらすじ】

Ｄｉｅｓ　ｉｒａｅのマリィが流出した世界はどういうわけかネギま世界だった。

このお話は筆者の妄想の一部を抜き出したものです。そういう物を不快に思われる方は回れ右をオススメします。

～注意事項～

現在執筆中の二次小説の小休止として今更読み始めたネギまの二次小説を妄想していたらいつの間にかＤｉｅｓとクロスさせてしまっていた。それはその一部を抜粋したショートショートストーリーです。

完全にネタです。Ｄｉｅｓグランドルート後、マリィが流出した世界がネギま世界だったという内容。諏訪原市が麻帆良になっており、蓮が一年程早く来ています。なので細かいツッコミは無しの方向で。二度言いますがネタですから。

Ｄｉｅｓのネタバレを含む可能性があります。読む際はご注意下さい。

～始まり～

麻帆良学園高等部に続く路を歩く六人の男女がいた。

共通する点が同じ制服を着ている位でまとまりの無い、どうして一緒にいるのか一目では解らないグループだ。

「ねえ、知ってる？　女子中等部の所に子供先生で来るんだって」

銀の髪を腰まで伸ばした見た目大人しそうな少女が突然話題を変えた。さっきまで教会でロックがどうとか話していたにも関わらず全く関係無い事を口走る。

そんな少女に他の五人は慣れているのか、ごく自然にその話題転換を受け入れる。

「知ってる。イギリスだっけ、確かヨーロッパのどこからか来る天才少年。十歳で学校を卒業して、教師になる為にこっち来るんだよねぇ」
妙に詳しく説明したのはショートカットの少女だ。やる気の無さそうな、気ダルそうな雰囲気を持っている。
「へえ、十歳で卒業かあ。すごいねえ、その子」
先頭を歩く活発そうな少女が振り返る。本人が目の前にいないのにやけに感心しているようだった。
「海外じゃあ別に飛び級なんて珍しく無いだろ。しっかし、どうして日本の学校来るかね」
金髪の、シルバーアクセサリーをジャラジャラと身につけた青年がどうでも良さそうに言いながら胸ポケットを探る。
「ちょっと司狼、煙草何て吸わないでよね！　しかも通学路で！」
「そうね。綾瀬さんの言うとおり、止めてくれる？　ヤニの臭いが髪について迷惑なの。でないと、煙草の代わりに貴方の頭に火を付けたくなる」
黒髪長髪の少女が冷たく言い放つ。
「なにこの放火魔。マジこえー。なあ、蓮」
蓮と呼ばれた青年が振り返る。童顔を迷惑そうに歪ませている。
「俺を巻き込むなよ。燃えるなら一人で燃えてくれ。消防車は呼んでやるから」
「どいつもこいつも冷たいねえ」
「遊佐君の事はどうでもいいとして」
「ひっでえ」
「君、こんな事じゃヘコタレないでしょ？」
「そりゃあそうだけどよ……最近オレの扱いヒドくね？」
「それで、いくら飛び級だからって、日本で十歳の子供が教員免許取れたっけ？」
「普通は無理だよねえ。しかもいきなり担任だって。あの奇人変人で有名な２ーＡ」

「うわあ、ちょっと可哀想じゃない？」
「まあ、奇人変人で言えばうちのクラスも大概だけどな」
「そうだね。例えば遊佐君とか遊佐君とか、遊佐君とか」
「俺かよ……」
「一番の変人は休み時間の度に来る先輩なんですけどね」
「何か言った？」
「いいえ、何でもないですよ。話戻すけど、子供が教師っていいのか？」
「まあ、麻帆良だし」
「麻帆良だしねえ」
「それで片づけるのもどうかと思うわよ、二人とも」
「だってねえ、超常現象が普通に起こるし。それとビックリ人間。私この前車と同じスピードで走ってる人見たよ」
「私も森の方で分身してる人見た事あるわね」
「そもそもあんなバカでっかい樹があることがおかしいよな」
遊佐司狼の言葉に五人は都市の中心にそびえ立つ巨樹を見た。
「普通、観光資源になりそうなのに誰も来ないよねえ」
「何でか知名度低いよね」
「まあ、麻帆良だしね」
「引っ越してまだ一年も経ってないけど、凄い所だな。麻帆良って」
六人は認識阻害結界が利いているのかいないのか、判断に困る会話をしていた。

〜吸血鬼云々〜
停電した麻帆良。
その日、真祖の吸血鬼エヴァンジェリンとその従者茶々丸、英雄の息子ネギ・スプリングフィールドとパートナーのアスナの戦いが

始まろうとしていた。
　血を吸われ、ほんの数名だがエヴァの人形と化した一般生徒達。相手は操られている一般人に過ぎない為に、危害を加える事はできないと苦戦するネギ達。
　エヴァの笑い声が響く中、追いつめられるネギ達の前にまるで狙い済ませたかのように三人の男女が現れた。
「いたいた。ようやく見つけたぜ。まったく世話焼かせやがる。あいつ、何時から囚われの姫様って感じのヒロインに成りやがったんだ？　配役ミスじゃね？」
「何頭悪い事言ってんだよ。それより、あれ見てみろよ」
「ハッ、何アレ。映像で見るよりも実際に見た方がシュールだな。金髪ロリが空浮かんでやがる。しかもロボットまでいるぞ」
「向こうには噂の子供先生がいるわね。何だか光線みたいなの飛ばしてたりしてたけど」
「真帆良って何時から人外魔境になったんだ？」
「少なくとも、俺達が生まれる前からだろ」
「引っ越すんじゃなかった……俺の怠惰で平穏な日常返してくれ」
「諦めなさい」
「そうだぜ、蓮。これも日常の一つだ」
　明らかに異常な光景を眼の当たりにして尚、三人は平然と会話している。
「何だ、お前達は？」
　エヴァがようやく乱入者に話しかける。
「表の……しかも何の力も無い一般人か。私は今良い気分なんだ。この場は見逃してやるから帰れ」
　三人からは何の驚異も感じられない。エヴァンジェリンは虫では追い払うかのように手を振った。
「幼女にお情けかけられたよ俺達。ガツンと言ってやれよ、蓮。金髪美少女はお前担当だろ？」
「何でだよ。そう言うお前こそ吸血鬼担当だろ。あれが噂の吸血鬼

ならそれこそお前が相手しろよ」
「それこそ何でだよ」
「いや、なんとなく……」
「お前達、人の話を聞いているのか？」
男二人が言い合うのを見てエヴァンジェリンのこめかみが痙攣し出した。
独特の空気で佇む三人にネギ達も何を言っていいのか分からず呆然としていた。
「二人とも静かにしてくれる？　貴方達じゃ話が全然進まないから私が話すわ。ねえ、そこの貴女――」
「エヴァンジェリンだ。貴様達何者だ？　一体何が目的でここに来た」
何とか冷静さを取り戻しつつ、エヴァンジェリンは三人を見下ろす。最初は一般人だと思ったが、三人は冷静過ぎる。それどころか緊張感の欠片も無い。今、この状況を見れば誰もが体を緊張させ、戸惑いと言うものを見せるはずなのに。
ただの愚者か、それとも――
「ただの学生よ。目的はその子」
長髪の少女が指さした先。そこに操り人形となった茶髪の女子高生が夢遊病でも患っているかのように立っていた。
「お前達の友人か」
「ええ。その子を返して欲しいの。そうすれば貴女の邪魔はしない。元から興味も無いわ。私達に害がなければどうでもいいのよ」
「断る」
「交渉の余地無し、ね」
「即答だったな」
「まあ、予想はしてたけどな」
「ならばどうする？　人間が私に挑んでみるか？」
挑発するように笑うエヴァ。
「ちょっと、どうすんのよネギ！」

話を聞いていたアスナがネギを振り向く。
「一般の人を巻き込むわけにはいかない。……皆さん、逃げてください！　友達は僕が何とか助けますから！」
「へえ、そう言うって事はあいつ治せんのか？」
煙草を捨て、司狼がネギに視線を向ける。
「は、はい！　半吸血鬼化してますけど、それなら元に戻せます。だから――」
「なら、安心して突っ込めるな」
「そうだな」
「ええ、そうね」
「――――え？」
三人の言葉にネギを初めその場にいた全員が驚く。
「心配のタネは香澄があんな状態から元に戻るかどうかだったんだが、治せるなら遠慮はいらねえな」
「さすがにあのままにしておけないからな。最悪、吸血鬼捕まえて聞き出す必要があったが、これで手間が省ける」
「お前達……」
捕まえる。聞き出す。つまりは勝つつもりなのだ。魔力を封印されているとは言え真祖の吸血鬼であるエヴァジェリンに。
そんな愚かで無知な人間は幾度も見てきたエヴァンジェリンだが、だからと言って聞き流すほど彼女は寛容では無い。三人を睨み付けるように見下ろす。
「私に勝て――ッ！？」
銃声が轟き、エヴァンジェリンはとっさに人間離れした反射神経で弾丸を避けた。頬に掠め、血がうっすらと滲む。
「俺ら舐め過ぎだろ」
銃口から細い煙を出す大口径の銃を真っ直ぐにエヴァへと向けた司狼がいた。
「貴様……」
避けていなければ間違いなくエヴァの眉間に当たっていた。当た

った所で死ぬわけでは無いが、さすがに不愉快であった。
「女子供の後ろに隠れてバカ帰って来るの待てってか？　そんな奴は死んでいいだろ」
そう言って司狼は銃を回転させる。
「家から持ってきて正解だったわ」
螢が後ろに隠していた竹刀袋から真剣を取り出した。
「格好付けてるとこ悪いが、お前等それ銃刀法違反だからな。つうか櫻井は分かるけど、司狼お前そんな物どっこから手に入れてきた」
「色々と。それに麻帆良じゃあ教師も生徒も持ってるし。珍しくねえし。つか、お前こそ何で手ぶらなんだよ。吸血鬼退治つったら杭とか銀とか持ってくるもんだろ。あと聖水」
「ゲームのし過ぎだ」
「ところで二人とも。私も女なんだけど？」
「そりゃあ、お前……」
「俺の中じゃ女のカテゴリーに入ってねえんだ」
「――へえ」
「――って蓮が言ってたぜ」
「ちょっと待てこのバカ」
「二人とも、この件が片づいたら話があるわ」
「俺巻き添え」
「お前のせいだろ」
「貴様ら……」
緊張感の無い三人のやり取りに、とうとうエヴァンジェリンがキレた。
「良い度胸だ！」
放たれる魔弾の射手。三発だけだが、それは人を殺傷するには余りある。
だが、三人は棒立ちの状態から信じられないほど素早く動き、魔法をかわし、エヴァンジェリン達に向かって走る。
「おら、ボウズ！　援護してやるからとっととやっちまえ！」

４５口径の銃を片手でエヴァと茶々丸に向けて発砲しながら司狼が叫ぶ。
弾丸は正確に二人の急所に向かう。
エヴァンジェリンは弾丸を防ぎながら驚愕していた。
躊躇も容赦も無い動き。女子の方は武術の心得があるようだが、男二人は場慣れしているだけで動き自体は素人だ。
それでも、魔法も気も扱えない表の人間が吸血鬼に挑もうとしている。いや、現在進行形で挑んでいる。
不可解さと不気味さを感じながらも、エヴァは彼ら三人を危険と判断した。

～そういや、魔法って練習すれば誰でも使えんの？～

「何て事があったらしいの」
「ハハハッ、それは大変でしたね。しかし、力を封印されているとは言え、あのエヴァを敵に回すなど賞賛に値しますよ」
図書館島内部、最深部に近い階層に二人の男女がテーブルに向かい合って紅茶を飲んでいた。
一人は髪の長い優男風ながら胡散臭い笑みを浮かべる男。もう一人はうっかり迷ってどういうわけか深部に辿りついた麻帆良学園高等部裏ミスの少女だ。
「それで相談があるの」
「玲愛さんが私に相談ですか。明日は千の雷でも降ってくるんでしょうか」
「何言ってるか分かんないから無視するね。吸血鬼の件については解決したから問題ないの。藤井君や遊佐君も結構エグい事したけど、一応和解したから。問題はこれからの事なんだ」

「これから、ですか？」
「子供先生から聞いたんだけど、魔法関係者で無い人が魔法の存在知ってしまうとその人を記憶を消すんでしょ？　そして一般に広く魔法使いだって知られると魔法使いの方はオコジョにされる。……あってる？」
「ええ、そんな感じでしたね。貴女の場合は私に出会って既に知っていますけどね。あれ、そうなると私はオコジョにされてしまうのでは……ハッハッハッ」
「貴方がオコジョに成るのはそれはそれで面白そうだけど、私は記憶が消されるのが嫌なの」
「誰であろうとそうでしょう」
「うん。特にそういう事に過敏なのがうちには二人もいるし。記憶消されたなんて知ったら怖いよ？　それに、記憶を消されても、多分また関わっちゃうんだと思う」
「その根拠は？」
「そういう物じゃない？　人生って。一度関わると泥沼みたいに引きずり込まれるの。抵抗すればするほどドンドン沈んでいく感じ」
「成る程、確かに貴女の言うとおりかもしれませんね」
「せめて沈んで窒息しないように関わりながらも一定の距離を保ちたいの」
「結構わがままな願望ですよ、それは」
「周りの評価なんて知った事じゃないよ。好きに言わせればいいの。それで、これは相談っていうか頼み事何だけど」
「怖いなあ、その頼み事。白スク水着てくれたら考えて上げますよ？」
「ここにある本燃やすよ？」
「それはちょっと困りますね」
「偶然、ここに灯油の入った水筒があるの。きっとよく燃えると思うよ。うん、本もよく乾燥してて燃えそう」
「どうして偶然灯油を持っているんですか。分かりました。私で出

来る事なら協力させてもらいますよ」
「ありがとう。それでね――――」

～テレジア・マギカ？～

「というわけで魔法少女になったの」
「は？」
「え？」
「はぁ……。あの先輩。そんなドヤ顔でイタい事言われても意味が分かりませんて」
　玲愛の言葉に図書館島の隅でレポートをしていた連、司狼、エリーは頭のおかしな人間でも見るような視線を向ける。香澄と螢はパシらされて飲み物を買いに行っている。
「何かなその目は。私は別におかしくなってないよ。それに、今更魔法使いなんて珍しくないでしょう」
「いや、まあ、最近はそうですけど」
「一応言っておくと、別によくいるマスコットと契約したわけじゃないから。ちゃんと努力の賜物です。だからカードをキャプターしたり全力全壊で砲撃撃ったりマミったりしないよ」
「……」
　とりあえず何を言ったらいいのか分からなくなる蓮だった。
「それでセンパイ、何か出来るようになったの？　見せてよぉ」
「まあ、まだ成り立てだし。大した事できないけど、色々ご都合主義が働いて無理やり仮契約だけは出来るようになったの」
「仮契約？」
「うん。魔法使いと契約すると魔力の供給で身体能力が上がったり、契約者と念話できたり。中にはアーティファクトって言う固有の魔

法の道具も使えるんだって」
「へえ、面白そうじゃん」
「アーティファクトか。興味あるね」
「という訳で藤井君。ナイトになりなさい」
「は？」
「命を懸けなさい。か弱い乙女を守りなさい」
「……えーっと、つまり俺にその仮契約をしろと？」
「うん、そう」
ふじい　れん　は　にげだした
「……遊佐君、本城さん、捕まえて」
「はいよっと」
「いえっさー」
「あっ！？　こら離せ！」
「暴れんなって。もし先輩の言う通りならあの吸血鬼も追い払えるかもしれないんだぞ。それに面白そう」
「狙われてるのはお前だろ！　って最後何て言った！？」
「そうなんだよなあ。あのロリ吸血鬼、俺を目の敵にして会う度に殺意ぶつけて来んだよな」
「無視すんなコラ」
「昼間は大人しいけど夜会ったら追っかけてくるんだぜ？　吸血鬼と夜中に鬼ごっこってどこのB級ホラーだよ」
「ニンニクスプレーのせいじゃない？」
「アレ作ったのエリーだろ。つうわけで、蓮。俺の為に実験台になってくれ。失敗したら失敗したで面白そうだしよ」
「なに？　遊佐君も契約したいの？」
「それが複数にも出来て、蓮が成功した場合はちょっと頼もうかなって」
「契約にはキスする必要あるんだけど、私は嫌だよ」
「え、マジで？　じゃあ、いいっス」
「素で引かれるとそれはそれで腹立つね。まあ、いいか。一応、キ

ス以外にも方法あるから安心していいよ。手間が掛かって少し気持ち悪いけど」
「なら何で俺は拘束されてキスされようとしてるんですか！？」
「だって、その為に覚えたんだし」
「思われてるなぁ、蓮。男冥利に尽きるな」
「わぉ、センパイってば乙女～」
「乙女？　これが乙女か？　全世界の乙女に謝れよ！」
「二人とも、藤井君をこの魔法陣の中に連れてきて」
「ああ、それ宇宙人と交信する為に描いてたんじゃないんだ」
「ちょっと待てお前等。人の意志無視して勝手に話進めんな！」
「観念しろよ蓮。何事も諦めが肝心だ」
「っざけんな！」
「綾瀬さん達が帰ってくる前に済ませちゃおうか」
「ほらほら、ぶちゅぅっとやって下さい、氷室センパイ」
「だから俺の意志は！？」
「うっせぇなあ。本気で嫌なら俺ら殴ってでも抵抗してるだろお前。よっ、このツンデレ」
「違え！」
「ん」
「おっと、センパイが目を閉じてレン君に迫ったあ！」
「ヒューッ、ヒューッ」
「みんなー！　ジュース買――――って、何してんですかあああああぁぁぁぁあああああっ！」
「……不潔」

続くわけがない

（後書き）

誰特なんでしょうね。この短編

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0745r/

＜ネタ＞　マリィは大変な世界を流出させました＜ネギま×Dies irae＞

2011年2月21日06時25分発行